

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 富山 豊

本論文は、フッサール現象学における最も根本的な概念である「志向性」について、初期・中期の志向性理論に焦点を絞り、現代分析哲学の議論を視野に入れつつ、その意義と射程、そして今後の可能性を探った意欲的な論考である。論文は序論と結語を含め、10の章からなる。

序論ではまず、「志向性」という概念が課題として設定され、第2章「いくつかの予備的考察と問題の定式化」では、フレーゲとフッサールの意味の理論をめぐる David Bell の解釈を手がかりに、「志向性」をめぐる問題が、志向的对象と現実の対象との関係をめぐる問題、および「無対象表象」の問題として際立たせられる。続く第3章「フレーゲ的意味論と初期志向性理論」では、ダメットによって定式化されたフレーゲの意味論における「意味論的値」という概念に注目がなされ、これをもとに、『論理学研究』を中心とするフッサール初期志向性理論が再構成されて、対象と意味との関係が解釈される。第4章「志向的「対象性」概念の広がり」では、フッサールの「対象」概念が、より高次の対象性である「事態」や普遍者、抽象体なども含むものであり、それに応じて作用の「意味」も二義性をもつことが確認される。続く第5章「作用の時間性格」では、意味の二義性に基づいて、志向性が心ないし意識の分析において解明されるゆえん、および作用の時間性格が明らかにされる。また第6章「対象の超越性と意味の透明性」では、第5章を受けて、対象と意味との関係が、対象の超越性と意味の内在性ないし透明性として論じられる。

第7章「初期志向性理論の理論的特徴と歴史的特徴」では、第6章までの議論を体系的に振り返り、フッサール初期志向性理論の反実在論的傾向と反因果説的傾向が際立たせられる。またそのことによってこの理論が、志向性を受容性として捉える伝統に対して一線を画するものとして、哲学史に位置づけられることが明らかにされる。第8章「中期志向性理論へ」では、初期志向性理論が『イデーン I』を中心とする中期志向性理論へと展開していかざるを得なかった動因が主として 1908 年の『意味論講義』に基づいて明らかにされ、その上で『イデーン I』のノエマ概念を意味論的値として解釈する試みがなされ、それに基づいてノエマと対象との関係が論じられる。第9章「超越論性の徹底とダメットの反実在論」では、ダメットの「正準的証明」という概念を参照しつつ、初期・中期志向性理論を超越論的観念論として、いわば認識論的な取り組みからの存在論として読み解こうとする試みがなされる。結語では、全体の議論が改めて概観され、フッサール現象学の志向性理論が他の哲学分野にも開かれうる可能性が示されて、考察が締めくくられる。

以上のように本論文は、フッサール初期・中期志向性理論における「志向性」概念の意義と射程を、現代分析哲学と対話させつつ明らかにした、非常に意欲的な論考である。形式的な面で一部、論文としてのまとまりに欠ける部分があるなど、改善されるべき点も若干見受けられるが、現代分析哲学の議論を十分に踏まえた上で、フッサールの初期・中期志向性理論を反実在論的な超越論的観念論として解釈する方向性を示した本論文は、今後の展開の可能性も含め、全体としてきわめて秀逸なものと評価される。よって、本論文は博士（文学）の学位を授与するに値するとの見解で、審査委員全員が一致した。